

C. Wallace “Critical Reading” 理論の研究

澤口 哲 弥
(2016年10月6日受理)

Understanding C. Wallace's Critical Reading

Tetsuya Sawaguchi

Abstract: This paper reports on the understandings of Catherine Wallace's critical reading theory by reviewing her works from 1988 to 2012 and an interview with her conducted in London on 28th March, 2016, as her view that society can be understood through language provides scaffolding to build a theory of critical reading in Japanese language education. In the interview, we discussed 1) her interests and career in this field and background for her ideas, 2) the reason why her teaching practices focus on written texts, 3) the relation with other approaches such as critical thinking, and 4) reading materials and tasks. The interview clarifies that she was originally interested in studies on language such as semantics and applied linguistics, and that she has always been encouraged by the awareness of political issues. Furthermore, she has been reading ideology in texts by practicing critical literacy, sticking to written texts as reading materials. Both her theory and method show the potential for application to the teaching of reading in Japanese language education in order to associate language with society.

Key words: Critical Reading, Literacy, Context, C. Wallace

キーワード：クリティカル・リーディング，リテラシー，コンテキスト，C. Wallace

1. はじめに

筆者はこれまで評論文を中心にクリティカル・リーディングの実践・研究をしてきた（たとえば澤口，2013）。その目的は、クリティカル・リーディングによって学習者が民主社会の形成者としてことばの力をつけることを目指すことであった。ただ、参考とするべくレビューした国語科教育における「クリティカルな読み」の先行研究には「ことばを読むことで社会を読む」領域のものが少なく、クリティカル・リーディングの定義も定まっていないことがわかった（澤口，2016）。筆者はこのことを、国語科教育の解決すべき課題とと

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：難波博孝（主任指導教員），

田中宏幸，間瀬茂夫，松本仁志

らえ、その解決の方向性として、民主社会の形成者たる個々人のことばの力を育成する「国語科クリティカル・リーディング」の理論構築を進めている。

2. 本研究の目的

本論は、今後の「国語科クリティカル・リーディング」の理論の土台とすべく、Catherine Wallace (UCL 名誉教授，以下 Wallace) の Critical Reading の理論について、彼女の理論を文献から考察した澤口（2015）と、考察を深めるために行った本人へのインタビュー調査結果とを合わせて、その成果と課題をより明確にした上で、日本の国語科教育にどのように活かすべきかについて示唆を得ようとするものである。

3. Wallace の文献整理で明らかになったこと

これまでの文献整理（澤口，2015）から，Wallace の Critical Reading が，フレイレの批判的教育学，フェアクロフの CLA，ハリデーの選択体系機能文法などを背景理論としながら，ことばの背景にあるイデオロギーや力を読む指導理論であることがわかった。

Wallace は，対象とした第二言語学習者の多様性を活かしつつ，マイノリティである彼／彼女らが既存の社会に対等に参画するためのクリティカル・リテラシーを育む実践をしてきた。また，教材に広告や雑誌記事などの社会的テキストを用い，あたりまえととられがちの中にある隠れたコンテキストや前提を，ことばの分析を通して読んできた。たとえば「五つの問い」は，テキストのイデオロギーを読むタスクとして読みをより社会的な読みへと導く方略であった。授業方略については，学習者の多様性を活かすべく有効な対話的關係が作れる環境を設定し，意見の交換がスムーズにできる工夫をしてきた。

Wallace の理論は，ことばを通して社会を読むことを具現化した実践であると言える。

4. 本研究の方法

本研究は，文献整理（澤口，2015）で明らかになった内容の確認，また明らかにならなかった部分の解明のためにインタビューを実施し，その結果から Wallace の理論について統合的に整理をするものである。

インタビューでは次の4つの目的を設定した。

A：Critical Reading の研究動機と経緯，背景理論

一つ目の目的は，Wallace の Critical Reading の研究動機と経緯を明らかにすることである。筆者は，クリティカルに読む対象を社会に拡張することは，学習者の社会的な問題発見力，具体的にはことばを通して社会における政治的意図や商業的意図などに気づき，立ち止まる力を涵養すると考えてきた。そしてそれらは，結果的に学習者の生き抜く力を保障し，社会の構造を編み直していくことにつながると考えてきた。仮に Wallace の研究動機と筆者のこのような問題意識とが共有できれば，国や文化的背景を超えて同じ教育課題でつながることができ，国語科クリティカル・リーディングへの援用の道筋が見えると考えた。

B：Critical Reading と文字テキストとの関係性

二つ目の目的は，Wallace の理論が文字テキストを読むことにこだわり続けてきた理由を明らかにすること



Catherine Wallace
(筆者撮影，2016.3.28)

とである。なぜなら，Wallace の社会的テキストを読む方略が，似た領域と思われるメディア・リテラシー教育と違って，ことばの選択や文法など，あくまでことばに着目するものだからである。ことばを扱う国語科教育への援用を考える上で，このことの目的や意義を確認することは必要だと考えた。

C：Critical Reading と他の指導理論との関係性

三つ目の目的は，昨今のクリティカルな読みの指導をめぐる導入されている PISA，クリティカル・シンキングなどの理論への Wallace の見方を聞き取ることによって，Wallace の Critical Reading の立ち位置を明らかにすることである。このことは，既存の理論との相違をより鮮明にさせ，Wallace の理論を援用することの意義が一層明確になると考えた。

D：Critical Reading とタスクとの関係性

四つ目の目的は，Wallace が提案してきた「5つの問い」（後述）など，授業における Critical Reading のための発問や活動，また Wallace が積極的に導入している社会的テキストの意図と目的を明らかにすることである。このことによって，国語科教育に導入する際の原理的な意義が明確になり今後の理論構築に活かすことができると考えた。

5. インタビューの概要

Wallace へのインタビューは，次の要領で実施した。

- ・日時：2016年3月28日（月）11:00～13:30
- ・場所：Wallace 氏の自宅（Ealing, LONDON）
- ・記録：IC レコーダー，ビデオ
- ・形式：対面による談話形式

具体的には，3章で述べた目的を果たすべく次のような質問項目を設定した。

〈Aに関わって〉

- a. 研究を志した動機と経緯
- b. 影響を受けた理論, 関連研究者
- c. 社会的テキストを読むことの意義
- d. 学習の到達目標 (個人の変容か社会の変容か)

〈Bに関わって〉

- e. 文字テキストを教材とすることの意義
- f. メディア・リテラシーとの関連性

〈Cに関わって〉

- g. クリティカル・シンキングとの関連性
- h. PISA の読解リテラシーとの関連性

〈Dに関わって〉

- i. 有効な発問, 授業方法
- j. 第一言語学習への援用方法

6. 文献とインタビューから見た Wallace の Critical Reading の理論

次に, 文献調査とインタビューによって確認された Wallace の Critical Reading の理論を整理する (インタビューの引用については「i」を付した)。

6.1. Critical Reading の研究動機と経緯, 背景理論

Wallace (2003) は, Critical Reading の背景理論として主に次の4つがあるとしている。

- ① フレイレ (Freire) による批判的教育学
- ② フェアクロフ (Fairclough) による CLA (Critical Language Awareness)
- ③ ハリデー (Halliday) による選択体系機能文法
- ④ ハーバーマス (Habermas) によるコミュニケーション理論

①は, ことばを知ることで世界を読むという Wallace の Critical Reading の根本理念として, ②はことばに隠れるイデオロギーや力を読み解く理論として, ③はことばを分析する読みのフレームワークとして, そして④は学習者に有効な対話関係を構築する授業方略としてそれぞれ Wallace の理論を支えてきた。これらは澤口 (2015) でおおむね整理されたことではあったが, インタビューでは, これらの理論が, Wallace 自らの研究動機や経緯の中でどのように関わってきたのかを聞き取ることをねらった。

a. 研究を志した動機と経緯

Wallace (2003) は研究の動機を, テキストのことばの中にある力やイデオロギーを読むためだった, と

述べている (p.3)。しかし, 詳細な研究の動機については他の文献も含めて言及がなく, 澤口 (2015) でもその整理は十分ではない。

インタビューで Wallace は, Critical Reading に興味を抱いた動機として「政治, イデオロギー, 私たちがどのようにことばによって操作されるのかに興味があったⁱ⁾」ことを挙げる。1970年代, 応用言語学や意味論への関心から研究を始めた Wallace は, 「出版界や紙媒体のメディア, もしくは新聞がどのようにものごとを偏った視点で描くかに興味があったⁱ⁾」とし, たとえば, 言語と女性の描かれ方として, Robin Lakoff の「Language and Woman's Place」に触発され, 「差別的な描き方をする語彙について関心を深めていったⁱ⁾」と言う。Wallace はまた, 現在もイギリスには「非常に無責任な大衆向け出版社があって, 多くの人がそれがそういうものを読んでいるⁱ⁾」との認識を示す。

このことから Wallace の学問的な出発点が, 意味論や応用言語学ということばの学問領域にあり, そこに Wallace の政治的, 社会的問題意識が反映されて理論が構築されたという経緯をみることができる。

b. 影響を受けた理論, 関連研究者

主な背景理論は先述の①②③④の4つの理論であることは, 文献 (たとえば Wallace, 2003) から明らかになったが, ④の詳細及び近年の新しい研究については澤口 (2015) ではレビューできず, 特に Wallace が注目する新しい研究者 (「6.3」で取りあげる) の名前を知ることは, 今回のインタビューの目的となっていた。

インタビューで Wallace は, 影響を受けた理論として, まずフレイレ, そしてフェアクロフ, 次いでハリデー (「d」でも詳述) の名を挙げた。フレイレについては1970年代にその業績を知り感化され, アメリカでのセミナーにも参加したという。一方のフェアクロフについては1988年に出版された『言語とパワー (Language and Power)』に重要な影響を受け—Wallace は当時クリティカル・ディスコース分析を研究の重要課題としていた—後にフェアクロフの編集した『Critical Language Awareness』に論考を発表している。また, フェアクロフの研究の「言語的側面」を支える「書かれたテキストの枠組み (フレームワーク)」理論としてハリデーの選択体系機能文法に注目し, そのことを取り入れたとしているⁱ⁾。

フェアクロフについて Wallace は「マルクスやほかの政治理論に影響を受けていたⁱ⁾」としており, Wallace 自身もまた, 「私はずっと政治的で, 政治的

な活動に関わっていて、社会派だった¹⁾と述べている。

インタビューで名が挙がらなかったのが④のハーバーマスであるが、Wallace は教室の場づくりにこの理論を活用している。その点を少し整理する。

Wallace (2003) は、ハーバーマスの提唱した普遍的語用論を取りあげ、「真実の追究は、個人主義ではなく対話の中に見られる」とし、「総合的な目的は問主観的理解を得ることだ」と述べた (p.50)。そして、教室は主観と主観がぶつかり合う場だとして、それらの現象を「対話」として昇華させ、社会形成に寄与することを目指した。

Wallace (2003) は、授業における発問には、①「授業を運営する発問 (Managerial Questions)」、②「実質的な発問 (Substantive Questions)」、③「探究的な発問 (Exploratory Questions)」の三つがあるとした。①は発言順を割り当てるなどの指示的な発問、②は授業者が学習者に対して授業者が答えてほしいと思っている一定の答えを要求する発問、そして③は学習者に新たな問いを持つような反応を起こさせる発問である (p.86)。Wallace はこの③のような発問が、学習者が新たな問いを持ち続ける連鎖を生むような発問—ハーバーマスの言う「討議」を呼ぶ発問—であることと見え、そのことをねらう授業展開を構想している。

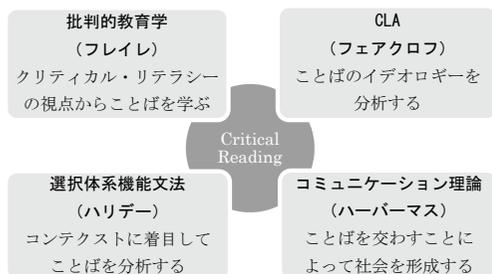
フレイレの批判的教育学においてもフェアクロフのCLAについても、共通する視座は、ことばの政治的な力を見抜き、民主社会の形成に参画することである。Wallace はそこに、ハリデーの理論を分析的なフレームワークとして、またハーバーマスの理論を協働性を発揮する方略としてうまく機能させてきた。

これらの点から、4つの背景理論のWallaceのCritical Readingとの関係性、またそれに果たした役割を次の【図1】のようにまとめることができる。

c. 社会的テキストを読むことの意義

澤口 (2015) で例示したように、Wallace の Critical

【図1】 Wallace の Critical Reading を支える4つの背景理論



Reading はコミュニティ・テキストを教材の中心として扱ってきた。Wallace (1999) は「郵送された手紙、広告、広告掲示板から剥がし取ったポスター、政治マニフェスト、旅行冊子、新聞の素材」などがそれにあたる。またそれを扱う理由について、異文化理解の出発点となることや、幅広い文化的イデオロギーの情報源となるからと述べている (p.107)。また、Wallace (2003) はこれらの教材を使ってテキストがどこから来たものか、また誰に向けて書かれたものか、またなぜ作られたかなどを、考えさせる授業を提案している (p.108)。

インタビューにおいて Wallace は、「学生たちが広い意味での政治 (政治、社会、文化的生活) に興味があれば、Critical Reading をする意味はない¹⁾」とし、「Critical が意味するところと何を関連づけていくかが重要¹⁾」だと述べた。そしてたとえば英語で高得点をとる学生が日常の出来事に関心があるわけではないという実態があることを紹介し、社会と接続しない学びの実態を憂慮する。また、同じくイギリスのEUからの離脱問題に触れ、世の中の新聞に見られるデマ (脅迫) の構造を指摘し、そのことを学校教育が扱わない実態に触れながら「もし私が今学校で働いていれば、この重要な話題について言語を通して細かく分析しているでしょう¹⁾」と語った。

このことから Wallace が社会的テキストを扱う意図が、単にその社会に適合する学習者を作るのではなく、その社会・文化であたりまえと見なされていることに別の視点を持ち込み、それらに他の読み方を与えることを企図するものであったことがわかる。

d. 学習の到達目標 (個人の変容か社会の変容か)

澤口 (2015) で触れたように、Wallace の研究が最初に到達したのは、多文化社会において読むことを学ぶ意味に関わる研究であった。この研究は Wallace (1988) としてまとめられる。その中心は海外から訪れた第二言語学習者である。Wallace (2003) はこの第二言語学習者を「立ち聞き読者 (the reader as overhearer) とし (p.17)、「メタ言語」によって既存の読みを冷静に質す修正者として位置づけた。

メタ言語を習得するために Wallace が援用したのがハリデーの選択体系機能文法である。ハリデー (1991) は、「テキストを作成しているときそれが語や文からできているように見えても、本当は意味からできている (p.16)」という立場から、ことばの背景にあるコンテキスト (文化のコンテキスト、状況のコンテキスト) に着目した。つまり選択体系機能文法は「選択体系」の名の通り、そのことばがなぜ選択されたのかに

着目するものであり、より社会的な意味を持つ分析方法である。

Wallace はインタビューで「書かれたテキストのイデオロギーを読むにはハリデーのフレームワーク（語彙の選択、文法の使い方）が有効で、今でもよく引用するⁱ⁾」と語っている。これらは Wallace の言う「メタ言語」言い換えれば「フレーミング (framing) ⁱ⁾」のための一技能である。

Wallace は「d.」の質問 (Critical Reading が目指すのは読み手個人の変容か、それとも社会改革か) について、インタビューで次のように回答した。

いい質問ですね。いい質問だというのは、一つの批判として、多くの人がクリティカル『教育法』、そう言います、この点を攻撃します。一般的に、彼らが言うのは、教師は生徒たちを変えようと操作するべきではない、と。しかし、私は教育とはどんな時も変化を考えることだと思うのです。そうでなければ、何のために教育があるの？ だから、私としては、両方、個人的にも社会的にも、と答えます。それに、生徒たちを個人レベルで関わらせることができなければ、実際、社会的にそうすることはできません。ただ抵抗するだけでしょうから。「ああ、彼女は政治の話をしてるだけだ。興味ないね」と生徒に思わせてしまうだけです。だから、個人的な関わりは、社会的関わりの一部を担っていますⁱ⁾。

このことから、Wallace が目標としたのは、あらゆるテキストに対し学習者が「フレーミング」できる「メタ言語」を習得することであり、社会的なことを個人的なことに関連付けて考え、個人や社会への認識を変革することであることがわかる。

6. 2. Critical Reading と文字テキストの関係性

背景理論の整理 (澤口, 2015) から、Wallace がテキストを読むことによって社会を読むことを目的としていることがわかった。では、なぜ Wallace は文字テキストを読むことを中心としてきたのか。また、社会を読むという点では、マスターマンやバッキングムらによるメディア・リテラシー教育も同じ目的性を有するように映る。では、それらと Wallace の Critical Reading は何が違うのか。ここでは、その違いについて整理する。

e. 文字テキストを教材とすることの意義

Wallace (2003) は文字テキストを中心に扱う理由について文字テキストは「安定したメディア」であり、

「文法にさまざまな知識を利用して分析しやすくなる」からだと言及する (p.8)。ここでの「分析」とはハリデーの分析ツールのことを指すが、Wallace は「文字テキストは対話する対象としての批判的リソースとなりやすい」ことを挙げている (p.8)。

この文法による分析について、たとえば Wallace (2003) は、ビルマ (現ミャンマー) の首長族の風習を紹介した雑誌記事を取りあげ、紙面に登場する女性になぜ「彼女の」という人称代名詞ではなく「the neck」「the windpipe」のような定冠詞が使われているのかを学生とともに考えている。そのような言語的選択に立ち止まることで、それが社会的に何を意味しているか (たとえば「隠された構成要素」) を考えることができるというのである (p.30)。

Wallace はインタビューで次のように述べる。

私はハリデーの研究に影響を受けています。このことについて、私は今でも彼の(論文)を引用します。より深く言語のイデオロギー、-わたしはこの「イデオロギー」ということばを使うのですが、隠された意味と言ってもいいでしょう-これを掘り下げたいなら (印刷された) テキストの方が話しことばよりうまくいくでしょう。印刷されたテキストは詳しく見るのにちょうどいいのです。ことばがより目に見えるのですⁱ⁾。

このことから、Wallace が、CLA や選択体系機能文法の観点を活かすために印刷された文字テキストを使い、それらを子細に分析する力を涵養しようとしていたことがわかる。

f. メディア・リテラシーとの関連性

メディア・リテラシーについては、Wallace の文献では特に言及がなされていない。

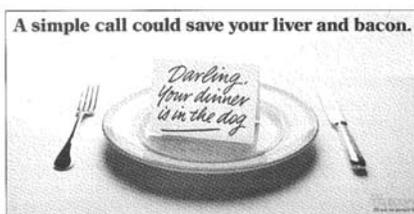
しかし、Wallace の次の【資料 1】のような社会的テキスト (Wallace, 1992a, p.17) を使った実践から、メディア・リテラシーのアプローチとの関連性があるのではないかと考えた。

Wallace はこのテキスト (【資料 1】) を読ませて、そこにあるイデオロギー、社会的側面に気づかせる実践を提案している。

Wallace はこの広告について、広告には家族の慣習につながるディスコースが多数埋め込まれているが、それらの隠れた前提は明示されておらず、それをあぶり出していく必要があると主張する。学生はこの広告にある慣習に全く気づかなかったと言うが、その原因を「多くの学生が、何時であっても家族の男性の都

合に合わせて妻は温かい食事を出すものだとされる文化の出身者だったから」と分析する。このテキストは簡単に言えば、「ご主人様おうちのお連れ合いに一本電話を入れておかないと、おうちのペットにベーコンを食べられてしまいますよ」という意味-「liver and bacon (肝臓とベーコン)」は「save your bacon (苦境を脱する)」の「bacon」から連想された語呂合わせ(文化的な連語)で特に意味はない-である。Wallaceはテキストについて、一見「夫が非難されるという表面的なフェミニズム」に目が行きがちだが、実はそこには「妻は当然料理をするものだ」という隠れた前提や文化的な意味があり、そのことに気づいていくことが重要だと述べる(pp.17-18)。

【資料1】



《日本語訳》

一本の電話があなたの肝臓とベーコンを救う
あなた、あなたの夕食は犬のおなかの中にあります

メディア・リテラシーとの関係について Wallace はインタビューで次のように語っている。

メディア・リテラシーはよく似た特徴は確かにあります。たとえば、若い研究者はマルチ・モダリティを対象としています。色の使い方やデザインといった領域です。もちろんこれらも大切なことですが、ただ私はやはり文字テキストの方がもっと多くの機会を与えてくれると思うのです。言語的により多くのことが詰まっていますから。しかも、テキストは難しいものが多いと思います。視覚的なリテラシー研究をしたり、美しく魅力的で文字量が少ない子どもたちが読めるような本をテーマとしたりするのもいいとは思いますが、それでも私はしっかり書かれた文字テキストの方がよりきびしく読む人の頭を働かせると思うのです。マンガ本を読むよりマルクスを読む方がずっと大変だとみんなわかっています。しかし私たちに知的に負荷の高い作業が必要なのです。そしてこのことを提供してくれるのは印刷されたテキストなのです¹⁾。

同じディスコース分析でも、話しことばを中心に分析をしたフェアクロフや、マルチ・モダリティの分析をしたクレス (Kress) と Wallace が違うのは、こうした印刷された文字テキストにこだわった研究を続けてきたことにある。

映像や写真をビューイングするのではなく、あくまでことばで表現されたテキストから社会を読んでいくという Wallace の理論を体言化した実践と言うことができる。このような実践によって、学習者の既存の認識を揺さぶり、社会のあたりまえや書き手の隠れた前提をあぶり出していくのである。一見、メディア・リテラシーの教材のように見え、実はことばに着目するのが、Wallace の Critical Reading であると言うことができよう。

6.3. Critical Reading と他の指導理論との関係性

次に、関連すると思われる理論についての Wallace の見方を整理する。

g. クリティカル・シンキングとの関連性

「クリティカル」を冠する用語は、さまざまあるが、なかでも「クリティカル・シンキング」は「批判的思考」とも訳され、楠見・道田 (2015) など、さまざまな領域への応用が期待される認知方略として提案されている。クリティカル・シンキング (批判的思考) について道田 (2015) は「合理的・論理的」「反省的・省察的」「批判的・懐疑的」の三つの要素があるとするが、たとえば論理の構成やことばの使い方の整合性など誤謬を指摘することを企図した読みや、テキストと、あるいは他者と対話することによって自らを省察するという読みは、これに類する実践であると考えられる。

この理論への Wallace の具体的な評価については、澤口 (2015) では示せなかったので、ここで再度詳細に整理をする。

Wallace (2003) はこのクリティカル・シンキングについて、「認知心理学の最近の読むこと概念化では、読みの指導における文章の役割はあまり注目されておらず、またことばのレベルにおける文章の様式についてマイクロ要素に注視しすぎる傾向がある」と述べる。一方、言語学者や応用言語学者は「きちんと文章に注目している」という認識を示す (p.11)。これは両者のリテラシーと読むことの関係性の認識に違いがあることを示すものである。

Wallace (1988) は、リテラシーの概念を「リテラシー」対「リーディング」という見出しで、次のように述べている。

「リテラシー」が読みの社会的機能への関心を提唱するのに対して、「読むことを学ぶ」は伝統的に、読むこと自体に必要不可欠と想定される一連の技能の習得を意味するととらえられてきた。しかし、多くの場合区別する意味がない。というのも、読み (reading) の社会的機能について読み手がどうとらえているか、つまり、読み書きができることが何を意味するのか、そして、読み書きの能力 (literacy) がどのように彼ら自身の生活に影響を与えうるかということが、読まなければならないという直近の状況への彼らの向き合い方を決めるからである。「リテラシー」ということは社会的または政治的意味を含んでいる。「リテラシー」の獲得は、何らかの社会的、職業的役割に付随するものとして考えられるだけでなく、国によっては、それは投票権とかいった政治的権利を伴うこともある。「リテラシー」は、大人であること、または完全な市民であることの一部として評価されるのである (p.2)。

今回のインタビューで Wallace はクリティカル・シンキングについて、対置される概念としてクリティカル・リテラシーを取りあげ、次の【表1】のような区別があったとした。

【表1】Wallaceによるクリティカル・シンキングの位置づけ

クリティカル・シンキング	テキストの論理的な面、主張と論拠のつじつまを理解すること
クリティカル・リテラシー	社会的政治的な議題が含まれるもので、テキスト (ことば) から世界を読むこと

Wallace は、両方の要素が必要だと断りながらも、「クリティカル・シンキングを研究する人びとはことばに政治的な側面があるということには基本的には興味はありません。読むこと、またはリテラシーを広く社会生活の中に位置づけることは必ずしも重要な議題ではないのです。認知訓練なのです¹⁾」と述べる。

これらのことを総合すると、Wallace が社会的、政

治的意味を含んだリテラシーを涵養する場合のアプローチとして、クリティカル・シンキングでは不十分だという認識を持ち、クリティカル・リテラシーに依って理論構築を推進してきたことがわかる。

ただ、インタビューにおいて Wallace が名を挙げたカナダ人研究者の Cynthia Jean Macknish (2011) は、これらは【表2】のように、対置されつつも「Range」として関係し合っているとしている。このことから、両者の概念は対立するものではなく補完し合うものとして存在するとみるべきだろう。Wallace はインタビューで、「クリティカル・リテラシーを涵養する中でクリティカル・シンキングも身につく¹⁾」と両者の必要性を述べている。

h. PISA の読解リテラシーとの関連性

次に澤口 (2015) で言及できなかった PISA の読解リテラシーとの関連性について述べる。レビューした論文が2003年までということもあり、Wallace の文献には PISA への言及はない。しかし、テキストを離れて学習者の既有的知識を活用して推論したり、熟考・評価したりすることは、何らかの関連性があるのではないかと考え、質問した。

インタビューで Wallace は、PISA のことは学術的に詳しくはないと断りながらも、「クリティカル・リテラシーについて研究している人は PISA には興味はないですね」とした後で、「イギリスは階層化された社会であり、そのような社会に PISA を持ち込んでも根本的な社会の問題解決にはならない」と述べる。そして、PISA の成績をもとに政府が「子どもたちにもっと勉強をさせないといけない」と、学校の授業日数を増やし訓練するような韓国の事例を挙げて、「政治の問題」に教育が絡め取られている事態を憂慮する¹⁾。アセスメントの結果で成績を序列化し国家プロジェクトのように学習改革に取り組むことは、根本的な社会改革にはつながらないという認識を Wallace が持っていることがわかる。

6. 4. Critical Reading とタスクとの関連性

次に、教材の選定も含めた Wallace の Critical

【表2】Range of Critical Reading Processes

Cynthia Jean Macknish(2011)

Evaluating texts analytically(critical thinking) 分析的にテキストを評価する		Considering texts from a power perspective(critical literacy) 力という観点からテキストを考慮する				
テキストの論理を批評する	根拠、筆者の意図と姿勢を問う	前提を見つける	テキスト構成の代替案を考慮する	より広い社会政治的影響に注目する	言語と力の関係を批評する	筆者が隠したテーマを暴く
主張と証拠の信頼性を評価する	疑いを持つ	プロパガンダの仕掛けを見つけ出す	多様な観点を考慮する	権威にある価値とイデオロギーを検討する	読み手やそのほかの人びとの位置づけに異議を唱える	社会の変革に向けて行動を起こす
誤謬を見つける	偏見を見つける	間テクスト性を利用する	欠けた、さらに(または)除外された声を見つける	批判的言語意識(CLA)を活かす	当然とされる前提に異議を唱える	社会の正義を追求する
事実と意見を分ける		言語意識(LA)を活かす				

Readingにおけるタスク戦略について整理する。

i. 有効な発問, 授業方法

澤口 (2015) で整理したように, Wallaceはコミュニティ・テキスト (広告, 新聞記事, リーフレットや申込用紙, 教科書, 雑誌) を用いた実践をしてきた。Wallace(1999)は, このようなテキストの利点として, ①「異文化比較の出発点になる」こと, ②「現代の英国における幅広い文化のおよびイデオロギー的風土について, 有益な情報源となること」の2点を挙げている。そして, これらのコミュニティ・テキストは「日常のコミュニティのテキストに組み込まれて, 絶えず強化される」という認識を示している (p.107)。

Wallace(2003)は, 1993年に大学で募集した特別科目「Critical Reading」の募集チラシに次の5つの目的を記している (pp.94-95)。

- ・ 行間 (テキストに隠されたメッセージ) を読む。
- ・ テキストの文化的な意味を理解する。
- ・ テキストが, どのように読み手の行動や考え方を特定の方法で操作しているかを知る。
- ・ テキストがさまざまな読み手のためにさまざまな方法で書かれていることを理解する。
- ・ テキストが, 人によってそれぞれどのように異なった方法で読まれているかを観察する。

これらを具現化したものとしては, たとえば次の【資料2】のような教材 (雑誌掲載の広告) を使った実践がある。これは, フェアクロフのディスコース分析を援用した実践提案である。Wallace (1992b) は, このテキストには「男性の断定的な態度と女性の躊躇と沈黙という対比によって特徴が示される」ディスコースが含まれていると述べている (p82)。

Wallace (1992b) は, このようなテキストをいくつか示しながら, 「テキストが構成される成り立ち」について理解をする必要性を説くとともに, イデオロギーを読む実践によって, テキストの構成環境だけでなくその制作環境にも目が向けられるようになるとしている (p.66)。ことばに着目し, その背景を読むことによって, そのテキストがどのような社会的状況から生まれたのかということが推論でき, その結果, 社会的プロセスとしての読みが可能となるというのである。

では, 具体的に Wallace はどのようなタスクを用意したのか。最も参考となるのが, 澤口 (2015) でも取り上げたクレスのフレームワークを援用して提案した「5つの問い」(【表3】)である (クレスの提唱したの

は1, 2, 3で, Wallaceが4, 5を追加した)。

Wallace (1992b) はこれらの問いの目的は「テキストのイデオロギーについての認識を高める」ためだと述べる (p.71)。また Wallace (1992b) は, 学生に対して「単に質問に対する答えを出すために読むのではなく, テキストから質問を作り出す」べきだとしている (P.71)。

【資料2】

Before the night was through they would reveal a lot more to each other than just their watches.

Copacabana danced below as he came face to face with her bewildering elegance.

Her movements held him spellbound as she slipped her immaculately manicured fingers inside her leather handbag to emerge with a cigarette pack.

It was the same American brand of Light 100's he always carried. Her pack was empty. "Have one of mine". Hesitating slightly, she took one and lit it herself.

That's when he noticed her watch. Like his, it was a modern Roman face with a stitched leather strap. "We obviously share the same excellent taste in watches, too. What's your favourite champagne?"

She laughed and spoke at last. "Same as yours?"

(Wallace, 1992b, p.82)

《日本語訳》

夜が明けるまでに、彼らは腕時計以外にたくさん のことを打ち明け合うだろう。

踊るコパカバーナを前に、男は人を惑わせる優 美さを見た。

男は女の動きに魅了され、彼女が美しくマニ キュアを施した指を革のハンドバッグに滑り込ま せ、煙草の包みを取り出すのを見ていた。

それは彼がいつも持ち歩いているのと同じ、 Light 100だった。彼女の包みは空だった。「僕の を一本どうぞ」彼女はわずかにためらいながら一 本取り、自分で火を点けた。

彼が彼女の腕時計に気付いたのはその時だっ た。彼のものと同様、それはローマ数字の文字盤 に、スティッチのある革のストラップだった。「僕 らは、腕時計も、素晴らしい趣味をしているよう だ。あなたのお気に入りのシャンパンは？」

彼女は笑って、最後にこう言った。「あなたと 同じかしら？」

【表3】 Wallace の5つの問い

1	(このトピックについて) なぜ書かれたのか。
2	(このトピックについて) どのように書かれたか。
3	(このトピックについて) どのようなほかの書き 方があるか。
4	誰が誰に対して書いているテキストか。
5	トピックは何か。

* Wallace(1992b,p.71) をもとに澤口が作成

インタビューで Wallace はこの「5つの問い」について、次のように述べている。

クレスから着想を得たこれらの問いは、テキストに取り組む前のオープニング・クエスチョンにいいと考えました。(Wallace 自宅のポストに投げいられていたという寄付を募るリーフレットを手にして) たとえば、「なぜこのテキストは作られたのか」、「このテキストは誰によって、そしてなぜ作られたのか」、「なぜこのテキストは私のところに来たのか」ということを考えるのです。私は、これらの質問が教室でとてもうまく機能することに気づきました。このことを考えることによって、あらゆることをあたりまえと考えなくなります。そして、これらは私たちが日常生活の中で常に対処しなければならないことです¹。

Wallace はさらに「一番大切なことは Cuibono (「誰の利益になるのか」「誰が得をするのか」の意。ラテン語) という質問を立てることです¹」とし、そのことが古典や政治への問いを生むと述べた。そしてこのような質問はテキストに深く入り込んでいくためのフレーム (frame) として機能するとした。Wallace はこのフレームについて、次のように述べる。

何より学生たちにあたりまえと思っていることに異議を唱えさせるのです。これが教育の基本理念です。世の中にはたくさん「もちろん」があります。やろうとしていることは、何歩か後ろに下がって、テキストと同じように状況を分析するということです。そうでなければ教育に価値はありません。これが、私がフレーミング (framing) と考えているものです¹。

このことから考えると、「5つの問い」にはそれぞれの次のようなねらいがあると考えられる。

【表4】Wallace の「5つの問い」のねらい

1	テキストの書かれた背景、問題意識を明らかにする。
2	テキストのレトリックを分析しその目的・効果を明らかにする。
3	複数の視点からテキストを再定義・再構成し、テキストの立ち位置を明らかにする。
4	テキストの匿名性を暴きターゲットを明らかにする。
5	テキストに埋め込まれたイデオロギーを明らかにする。

Wallace のタスク戦略は、社会的なコンテキスト、イデオロギーを読む目的から展開されてきたと言える。

i. 第一言語学習への援用方法

澤口 (2015) で述べたように、Wallace の Critical Reading は第二言語学習者への実践理論である。しかし、Wallace (2003) は、第二言語学習にあるメタ言語が第一言語学習者に希薄だとし、その必要性を論じている (p.35)。では国語科という第一言語学習者を対象とした学びの場で Wallace の理論は援用可能なのか。このことについてインタビューで Wallace は「できる」とした上で次のことを提案した¹。

- ・グループで取り組ませる
- ・グループごとにテキストの別々の面を考えさせる
- ・グループに報告担当のスポークスマンを作る
- ・同じ題材のテキストをたくさん用意して比較させる

これらの方法論はすでに国語科教育においても実践されていることではある。しかし一番の問題は、同質性が高い環境の中にかに異質性を持ち込み、ハーバーマスの言うような討議に持ち込むかという質的な保障だろう。そのことへの明快な回答は得られていない。

7. 成果と課題、及び示唆

本研究で明らかになった成果と課題を、国語科への援用の観点から「3. 研究の方法」に沿って整理する。

A : Critical Reading の研究動機と経緯、背景理論

Wallace の Critical Reading が意味論、応用言語学の知見をベースに、フレイレ、フェアクロフ、ハリデー、ハーバーマスらの理論を背景に構築されたことが確認できた。Wallace の Critical Reading は、ことばに立ち止まり、それらを分析することによって、テキストに隠れた社会的・文化的意味を見抜く資質を学習者に育む。これはクリティカル・リテラシーを育む教育であり、国語科の学びを社会に拡張させる上で大きな示唆を与えるものであると言える。

B : Critical Reading と文字テキストとの関係性

Wallace は、振り返りながら詳細な分析ができるという点で印刷された文字テキストを教材としている。したがって、同様に中心的素材として印刷された文字テキストを読む国語科の様態にもなじみやすい理論であると言える。ただ、Wallace が取り入れた選択体系機能文法は英語の理論であり、国語科に取り入れる場

合は、一定の工夫が求められる。また、Wallace の扱う文字テキストには、国語科の評論文に匹敵するものが含まれず、日本の国語科教育への援用のためには、Wallace 理論の日本への適合化とともに、従来の批判的な読み、および教育の理論との統合が必要と考える。

C : Critical Reading と他の指導理論との関係性

Wallace のアプローチがクリティカル・シンキングではなく、クリティカル・リテラシーによることが確認できた。一方、教育にスタンダードを求める PISA に Wallace らクリティカル・リテラシーの研究者は興味がなく評価もしないことが明らかになった。ただ、いずれの理論も Wallace の理論と共有される要素はあり、排除するべきものではないと考える。

D : Critical Reading とタスクとの関係性

Wallace はコミュニティ・テキストを用い、「5つの問い」を軸にテキストの背景のイデオロギーを読むタスクを構成している。そのねらいは既存のあたりまえに異議を唱えるためであった。このようなテキストおよびタスク戦略は、学習者の興味関心に応じた活用が可能で、Critical Reading の導入教材として期待できる。ただ、国語科への援用には、学習者が問いを立てるなど、さらに踏み込んだタスク戦略が必要となろう。また、同質性の高いとされる日本の教室に、どのような異質性を掘り起こし対話させるかについては、他論文で展開する予定である「方法論」において検討したい。

【参考文献】

楠見 孝 / 道田泰司 (2015) 『批判的思考-21世紀を生き抜くリテラシーの基盤-』新曜社
 黒川悠輔 (2013) 「国際理解教育における批判的言語意識 (Critical Language Awareness) の意義」『国際理解教育』第19号、明石書店
 黒川悠輔 (2014) 「ことばの権力性批判としてのクリティカル・リーディング- C.ウォレスによる教育的アプローチの位置づけをめぐって-」『早稲田教育学研究』第6号
 小柳正司 (2010) 『リテラシーの地平-読み書き能力の教育哲学』大学教育出版
 小柳和喜雄 (2003) 「批判的思考と批判的教育学の『批判』概念の検討」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』第12号
 澤口哲弥 (2013) 「高等学校における評論文のクリティカル・リーディング: 思考の過程を可視化する学習指導」『国語科教育』第74集
 澤口哲弥 (2015) 「国語科におけるクリティカル・リーディングについての考察- C.Wallace の理論を中心に-」広島大学大学院教育学研究科紀要、第一部、

第64号

澤口哲弥 (2016) 「国語科における『クリティカルな読み』の指導理論に関わる一考察」『国語教育思想研究』、第12号
 スコウラップ、ローレンス / コールドウェル、リチャード・T.(1991) 『From Text to Context』くろしお出版。
 塚田泰彦 (2003) 「リテラシー教育における言語批評意識の形成」『教育學研究』第4号
 徳井厚子 (2005) 「言語意識を問い直す- Critical Language Awareness の実践-」『信州大学教育学部紀要』第115号
 野村幸代 (2008) 「高校英語におけるクリティカル・リーディングの実践研究- キャサリン・ウォレスの理論を手がかりとして-」東京大学大学院教育学研究科、修士論文
 ハリデー M.A.K. / ハッサン R. (寛 壽雄訳) (1991) 『機能文法のすすめ』大修館書店
 樋口とみ子 (2010) 「リテラシー概念の展開- 機能的リテラシーと批判的リテラシー-」『〈新しい能力〉は教育を変えるか- 学力・リテラシー・コンピテンシー-』松下佳代編著、第2章、ミネルヴァ書房
 フィンリースン、ジェームズ、ゴードン (村岡晋一訳) (2007) 『ハーバーマス』岩波書店
 フェアクロー、ノーマン (貫井孝典 監修) (2008) 『言語とパワー』大阪教育図書出版
 フレイレ、パウロ (小沢有作ほか訳) (1979) 『被抑圧者の教育学』亜紀書房
 道田泰司 (2015) 「近代知としての批判的思考」『批判的思考-21世紀を生きぬくリテラシーの基盤』(楠見 孝 / 道田泰司編) 第1部 1-1、新曜社
 Fairclough, F. (1992). Introduction. *Critical Language Awareness* (pp.1-29). London : Longman.
 Kress, G. (1985). *Linguistic Process Sociocultural Practice*. Oxford University Press.
 Macknish, C. J. (2011). *Understanding Critical Reading in a ESL Class in Singapore*. TESOL Journal.
 Wallace, C. (1988). *Learning to Read in a Multicultural Society: The Social Context of Second Language Literacy*. New York: Prentice Hall.
 Wallace, C. (1992a). *Reading*. Oxford : Oxford University Press.
 Wallace, C. (1992b). Critical literacy awareness in the EFL classroom. In: Fairclough, N. (ed.), *Critical Language Awareness*. London : Longman.
 Wallace, C. (1999). Critical Language Awareness: Key Principles for a Course in Critical Reading. *Language Awareness*, 8(2).
 Wallace, C. (2001). Critical literacy in the second language classroom: Power and Control. In: Comber, B. & Simpson, A. (Eds.) *Negotiating critical literacies in classrooms*. Mahwah, NJ: London.
 Wallace, C. (2003). *Critical Reading in Language Education*. New York : Palgrave Macmillan.